

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	和歌：文苑
Author(s)	終人；湖村；花柴
Citation	龍南會雜誌， 1 2 6： 6 5 - 6 7
Issue date	1908-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6146
Right	

靈^{たま}ふたつわ

かれぬ、むか——幾萬年。

海は狂ひてびよめきぬ。

はた荒^あびなむ——幾萬年。

空のみ星はかゝやきぬ。

はたうるみあむ——幾萬年。

あけぼのや、

空はほてりぬ薄^{うすくれない}紅。

涌は潮の香^かみをざりぬ。

あはれこの時白鳥は

歡^かび翔^かり、たゆたひぬ——

幾秘語^{いくひご}の影とかも。

和歌

終

人

算みだく岩みな爛るふと恐る我心燬く汝が劫の熱
(阿蘇に登りて)

一線を汝はひく我も一線を明けぬ暮れぬも今日も亦ひく

つと白き鷺^{べん}の鉄筆はしり大海を戀ふとつゞけぬ汝にかゝるあゝ

穹窿は世界を蔽ふあゝ苦し逃れんと呼びこゝる終日

異らぬ石二つなくかくこゝろ悲しき今日を又明日に生く

湖

村

草萌ゆる春の大野の青をけて空行く若き心の駒よ

花薔薇咲く日を笑みて語らひし若さにかへれ吾が思ふ人
散る花のひとつゝに胸にしみて涙と凝るや悲しき夕
相遇ひて言はで別れし春の夜の夢見心の人ふたりかな
問はざれなそは唯春の夜の夢に相見し人と淋う笑みぬ
夕月夜大路の群れをかき分けて暗に消ぬぬる裸馬かあ
さゝあやや春流れゆく水の上に花を数へぬ物思ふ日と
あゝ心何に憧れ何もとむ吾れと得わかぬ淋しさに居ぬ
紅の雲湧く底に戀歌ふ鰐鮫なきや曙の海

花

柴

山の湯は晝ほとゞぎす青葉かけ晝も蚊帳つる瀧近き室
はとゞぎす啼かぬ夜毎は山の湯に一人端居の月こそよけれ
美しき姫を盗むと鬼や來る山の辰巳はたゞならぬ雲
君來ます小町業平皆を來たるまゝこ閉づれば賑はしきかな
繁り葉に中にかくれてさめくと君かも泣ける五月雨する
海につゞく五町青田を白鷺が日ごと來て舞ふ五月となりぬ
わが胸を焔につゞみほゝねます君は優しき惡魔のわん子
ふる郷は今さつき待つほとゞぎす青葉に啼かん山かげの家

闇に入る一步一步にわたのゝきて泣けども君も泣き給へども
 ひな罌粟はあよやかあれどあかゝと燃てこそ咲け君に似ぬ花
 南洋は紺青の海、瑠璃の空、眞白羽むれて雲作るあり
 君行けば踵の跡に蝶うまれ息に虹立つ五月野の路
 水はかれて石は火を吐く炎熱に撫子あわぐ夏河原路
 新愁は青葉に埋もる泉めき有りと知られて湧く涙かな
 ともすれば歌は御室に夢は野に飛ぶといみじく憎み給へど。

夏 雑 吟

李

王

茶釜買うて卯月の庵完しや
 磯岩の四月鮑子榮螺の子
 夢を賣りゝ黄金や卯月庵
 拳大の筆呵する時雷神
 簷頭の瓢落つるや雷神
 眉近く橋あり溪居鮎の飛ぶ
 僧下下山布施懷に鮎買はう

鮎返といふ瀧津瀬や雲暮る
 五月雨林繞山園の草廬かな
 玉櫛笥新居の疊風薫る
 古書を得て詩僧歸山や閑古鳥
 鶴あさる入江の芦や明易き
 高山大河句に收め得り茂かあ
 庵の茂四壁の書画に眼を曝す
 通路に橋あゝ卯の花腐かあ

曉